

| | |
|-------|---|
| 研究課題 | 18世紀後半のポーランド・リトアニア連邦における シュラフタ（貴族）の社会史研究（継続） —官職社会、地主社会、宮廷と地方の問題を中心に— |
| 研究代表者 | 白木太一（歴史文化学科 准教授） |

I. 研究の目的

本研究は、昨年度の大正大学学術研究助成の継続研究である。その研究の目的に関しては、昨年度の成果報告書にその詳細を記した。重複を避けるために本稿では要約を記すにとどめる。

私のこれまでの研究における最大の眼目は、18世紀後半のポーランド＝リトアニアにおける政治・社会改革の実態を比較史的観点から捉え、16世紀に確立された貴族共和政がどのような形で継承され、変化を蒙ったのかを多面的に探ることにあつた。その成果の一端は既に、2005年に公開された拙著『近世ポーランド「共和国」の再建—四年議会と5月3日憲法への道—』（彩流社刊、学位論文を元にしたもの）において公表することができた。

昨年度からの大正大学学術研究助成では、近世ポーランド＝リトアニア国家の諸相を歴史的に考察するという大枠では前回の研究を継承しながら、その考察の力点を社会・文化史的側面に移していきたい。その研究の目的を今一度箇条書きで要約しておく、

- 1：近世ポーランド＝リトアニアの地方社会を多元的な官職社会と捉え、その官職間の結びつきを考察、分析しながら、当時の社会の人的結合の基本的要素がどのようなメカニズムに基づいていたのかを具体的・実証的に検討すること。
- 2：18世紀後半のポーランド＝リトアニアにおける宮廷文化と地方の貴族文化の協調と対立を考察すること。
- 3：地方シュラフタの公共観念を、地主シュラフタの理想像を通じて検討すること。
- 4：これらの課題全てにかかわる人物であるイグナツィ・クラシツキ(1735－1801年)を中核に据えた研究を進めること。

以上である。

II. 研究の経過

まず、昨年度に引き続き、ヴァルミア司教区やクラシツキ、スタニスワフ・アウグストあるいは18世紀

ポーランド関係の新刊書の収集を行った。昨年度と同様、ヴロツワフにあるインターネット書店レクシコンLexiconとワルシャワの学術書店ボレスワフ・プルス学術書店księgarnia naukowa im. Bolesława Prusaなどを通じて、新刊書数十点を購入した。さらに2009年9月に実施したヴァルミア司教区視察旅行の折には、オルシュティンやリツバルクで、ヴァルミア司教やクラシツキに関する貴重な研究書を入手することができた。

今年度は新たに、ワルシャワ大学付属図書館にも継続的に通うことができた。この図書館はワルシャワでは有数の蔵書量を誇り、近代的な館内施設や付属施設を備えた図書館である。予め必要な文献リストをホームページを見ながら作成し、図書館に赴いて館内の開架式書庫や別置図書を開覧しながら、必要な文献に関してはそれを複写した。

(複写した主要文献)

- A.Kopicko, *Duchowieństwo katolickie diecezji warmińskiej*, t.1, Olsztyn, 2000.
- A.Kopicko, *Duchowieństwo katolickie diecezji warmińskiej*, t.2, słownik, Olsztyn, 2000.
- Słownik biograficzny kapituły warmińskiej*, Olsztyn, 1996.
- Warmia i mazury, Zarys dziejów*, Olsztyn, 1985.
- S. Achremczyk, *Historia Warmii i Mazur*, Olsztyn, 1997.
- T. Borawska, *Życie umysłowe na Warmii w czasach Mikołaja Kopernika*, Toruń, 1996.

III. 研究の成果

(A) ヴァルミア司教区への視察旅行

2009年9月9日から4日間、ポーランド北部のヴァルミア地方の視察旅行に出かけた。視察の主たる目的は、近世ヴァルミア司教区における中核都市とその歴史遺産を実地に見聞することであった。今回はオルシュティン Olsztyn、リツバルク・ヴァルミンスキ Lidzbark Warmiński、フロムボルク Frombork の三都市が視察旅行の中心になった。なおフロムボルクからは、ポーランドにおけるバルト海岸最大の都市グダンスク

Gdańsk まで至近距離にある。今回の視察旅行はグダンスクを含めて行うことにした。以下、視察旅行の概要を記したい。

(1) オルシュティンまで

史料収集のために滞在していたワルシャワがヴァルミア視察旅行の起点であった。ワルシャワ中央駅からグダンスク行きの特急列車に乗車した。ワルシャワ―グダンスク線はポーランド国鉄の大動脈の一つであり、スピードアップ等の整備計画が進められている。それに伴って現行列車はかなり徐行区間が多く、ワルシャワを出発して1時間半ほどはノロノロ運転が続いた。しかし車窓からは、典型的なマゾフシェ地方の農村風景―白樺林や小高く延々と続く丘陵や防風林―を十二分に満喫することができた。

ワルシャワから200^{キロ}程北に位置するイワヴァ駅で下車し、オルシュティン行きのローカル列車に乗り換える。この辺りから、点在する湖が目立つようになる。一時間ほどでヴァルミア・マズールィ地方の中心都市オルシュティンに着く。オルシュティンは現在175,000人の人口を擁し、同地方の行政・司法の中心であり、大学等の教育文化施設も充実している。駅から旧市街に至る中心地区の人々の眼差しは、昨年訪れたポーランド南東部の地方都市のそれと比べると、心なしか醒めた空気が漂っているようにも思えるが、同時に北方都市としての活気と気概が感じられた。旧市街を中心とした地区は中世以来の街区である。中世都市オルシュティンは、1350年にヴァルミア聖堂参事会によって設立された。旧市街の市壁の入り口に位置する門をくぐってみる。市庁舎、アーケードのついた商店群を中心とする格子状の街区は比較的コンパクトにまとまっている。北ドイツ都市特有の破風の付いたカラフルな家並が印象的である。旧市街の周囲には聖ヤコブ教区教会、そして旧市街最大の建築物である聖堂参事会の城がある。後者は14世紀から増築が開始され、18世紀にはバロック風の大改築がなされた、ヴァルミア聖堂参事会の本拠地である。現在はヴァルミア・マズールィ地方博物館となっている。ここでは、ヴァルミア・マズールィ地方の考古学的遺物、ゴシック芸術の遺品、中世以降のヴァルミアの金工芸品コレクション、大砲など火器のコレクション、18世紀から現代に至る民芸品のコレクションなどを見ることができる。この城には、参事会統監職にあったニコラウス・コペルニクス（ミコワイ・コペルニク）が1516年から1521年にかけて滞在した。本館には、コペル

ニクスが担当した参事会管轄の村落の資産目録も保存されている（写真①）。

(2) リツバルク・ヴァルミンスキ

ヴァルミア地方の鉄道の便は良いとはいえないため、都市間の移動手段は主として近距離バスである。今回もオルシュティンのバス・ターミナルから、リツバルク・ヴァルミンスキ行きのバスに乗った。リナ川に沿って北東に50キロメートルほど移動する。周囲には小麦畑や丘陵などの単調な風景が延々と続いていく。バスの乗客の大半は、通学や通勤、あるいはオルシュティンからの買い物帰りの地元の人々である。途中、ドブレ・ミヤストという参事会都市を經由して、およそ一時間でリツバルク・ヴァルミンスキに到着する。都市リツバルクは、1308年にヴァルミア司教エベルハルトがリツバルク城の周囲にヘウムノ法（都市法）に基づいた都市を建設したことにはじまる。この都市は、商工業面では目立った発展は見られなかったが、1350年から1795年まで、ヴァルミア司教が城内に司教館を構えたことで栄えた。現在のリツバルクは人口が17,580名である。今回は町はずれのホテルから小一時間の散歩を兼ねて、リツバルク城まで散策をした。ホテルから町の歴史地区に歩いて行く途中には、教区墓地、18世紀にたてられた温室、そして時計台を兼ねている聖ピョートル・パヴェウ教区教会がある。この町全体の雰囲気は、鄙びた地方都市といった感が強い。しかしリツバルク城のみは別格である。この城は、13世紀にドイツ騎士団によって建てられた4つの塔を持つ正方形の城と堀の部分を中核として、その周囲に増築されたゴシック様式の塔とバロック様式の司教館、そしてリナ川から分岐した池と枝垂れ柳が印象的な周辺部からなっている。14世紀から18世紀末までの歴代ヴァルミア司教は、この中核の堅固な城を拠点とした。司教館の中には、司教が生活をした食堂や住まい、政務を執った仕事場、裁判の間、講義室、そしてグラボフスキ時代にロココ風に改装された、華麗な装飾に彩られた礼拝堂などが併設され、歴代ヴァルミア司教に関する展示物とあわせて内部を見学することができる。また、城の建物の変遷に関する展示やクラシツキとヴァルミア司教区に関連する論集などが販売されていた。冬の寒冷さをはじめとして、周囲の気候は決して穏やかではなかったが、クラシツキはヴァルミア司教として司教区全般の行政をここで統括した。総じて、ヴァルミア司教の地域権力としての規模の大きさを肌で感じる事ができた（写真②）。

(3) フロムボルク

翌日はリツバルクからヴァルミア地方の中規模都市、バルトシュチュエを経由してバルト海沿岸のフロムボルクまでバスで移動した。乗客のほとんどは地域間の移動の乗客である。バルトシュチュエは第二次世界大戦まで旧東プロイセン領に属していた。そのため、リツバルクからフロムボルクまでの経路は、旧ポーランド領から旧ドイツ領に出て、再び旧ポーランド領に戻るといった形になる。とはいえ現在は、旧ポーランド領と旧ドイツ領の区別はほとんどつかない。バルトシュチュエで乗り換えてから2時間弱でフロムボルクに到着する。この町の人口は現在2,800名にとどまる。グダンスク湾（実際には、細長い中州が湾内に延々と伸びているため、フロムボルクと湾本体はほぼ遮断されている）に面した、猫の額ほどの港町である。13世紀後半からこの町はヴァルミア司教区の首府になった。この町は、海岸部の教区教会を中心とする住民居住区と、丘の上の大聖堂を中心とする地区とに分けられる。そのうち前者は規模が小さい。1310年にリュベック都市法を授与されたものの、市壁も持たない、農村に毛の生えたような都市であった。町が外敵の危機に瀕した際も、人々は大聖堂の領域に逃げ込んだという。現在も町自体は過疎化しており、かつては西方のエルブロンクとの間を走っていた鉄道も廃線となり、現在はバス運送に代替されている状況である。

辺鄙な海岸部に比べて大聖堂地区は壮観である。丘の上には大聖堂を中心に5つの塔と2つの門、司教館などが設けられた広大な空間になっている。当初大聖堂は木造の司教教会であったが、14世紀前半までにレンガ造りに改築された。同世紀末には大聖堂の建築がほぼ終了した。現在大聖堂地区はミコワイ・コペルニク博物館になっている。大聖堂の内部はプロイセン地方特有の星型の天井装飾で彩られ、主祭壇には後期ゴシック様式の聖母マリアの絵がある。大聖堂に隣接する鐘楼（司教ラジェヨフスキの塔）は塔内に入って螺旋階段を上ることができる。塔上の展望台からはグダンスク湾、周囲の農村、大聖堂、フロムボルクの町が一望のもとに見渡せる（写真③）。また司教館は現在コペルニクス博物館として、1515年から1543年までここを本拠としたヴァルミア聖堂参事会員コペルニクスに関する様々な展示がなされている。

大聖堂から東部にしばらく歩いて行くと聖霊病院の建物がある。ここは15世紀から活動した病院の施設が保存されており、現在は博物館として病院史、医療史関係の展示がされている。また病院の南側には薬草

園があって、さまざまな薬草が心を和ませてくれる。

(4) フロムボルクからグダンスクへ

翌日はヴァルミア地方西端のフロムボルクからバスでポモージェ地方の中核都市グダンスクに向かった。フロムボルクを出ると間もなく、ポモージェ地方の都市エルブロンクに着く。ここを経由して30分ほどでポーランドにおけるバルト海沿岸最大の都市（現在の人口456,000人）、グダンスクに到着した。グダンスクはドイツ人とポーランド人の協力のもとで中世にはハンザ同盟に加盟し、さらに近世初期にはポーランド国内の穀物を西欧に輸出して利益を上げた。いわゆる旧市街は中世に建設された運河に囲まれた、ドイツ都市の影響を受けながらもポーランド人都市民のオリジナリティが発揮されて両者の文化が見事に融合した、ポーランドでも独特の都市文化が花開いた場所である。

とりわけ旧市街の繁栄を象徴する施設としては長い広場、市庁舎、アルトゥスの館、聖マリア教会が挙げられる。長い広場はグダンスク市民が集会を開き、都市のコミュニケーションが集約された場であった。クラクフの市場広場と比べると狭いが、周囲の建造物の彫刻、ロゴは当時の都市民の経済的繁栄を物語っている。市庁舎はロンドンのビッグ・ベンを髣髴とさせる瀟洒な尖塔を備えた建物であり、中近世グダンスクの西欧とのつながりを想像させる建物である（写真④）。現在内部はグダンスク市博物館になっているが、今回は修復中で見学できなかった。アルトゥスの館は16世紀グダンスクの富裕商人の商工会議所になっていた場所で、現在は一階に当時に関する展示物が置かれている。館の前には海港都市の守護者であった海神ネプチューンの像がある。この周囲はこの街を訪れる観光客の待ち合わせ場所となっており、華やかな空間である。聖マリア教会はゴシック様式の巨大な建造物である。

B 公表した論文、ならびに執筆済み公表待ちの論文について

1：本研究助成の成果として公表した論文には以下のものがある。

白木太一「ポーランド1791年5月3日憲法—その沿革、前文の内容、歴史的意義—」『大正大學研究紀要』第95輯、1-20頁、平成22年2月

表記の憲法は、18世紀後半、スタニスワフ・アウグスト治世下の国制改革の柱として、四年議会の中で制定された、近世ポーランドの共和政国家の政体の集大成となった基本法＝憲法である。同時にこの憲法は

ヨーロッパでは初の、世界規模でもアメリカ合衆国憲法に次ぐ近代成文憲法であった。だが残念ながら、本憲法の翻訳はわが国ではまだなされていない。そこで本稿では、憲法の沿革を前提として憲法の全訳を掲載し、併せてその歴史的意義に触れた。以下に本稿の構成と要約を記す。

第1章「憲法の沿革」では、近世ポーランドの国制や身分制度が、17世紀後半以降のポーランド・リトアニア連合国家の行き詰まりの中で、具体的にどのような課題を抱えていたかをまとめた。また、1764年に即位した国王スタニスワフ・アウグストのもとで精力的になされた諸改革がどのようなものであったかを鳥瞰した。さらに憲法制定に直接かかわる議会（いわゆる「四年議会」（1788年-1792年））の中での憲法制定過程がどのようなものであったのかについても考察した。

第2章「1791年5月3日憲法（全文）」では、憲法の全文の翻訳をおこなった。この憲法の構成は以下のとおりである。前文、第1条：支配的宗教、第2条：地主であるシュラフタ、第3条：都市と都市民、第4条：農民、第5条：政治体制、もしくは公共諸権力の定義、第6条：議会、もしくは立法権、第7条：国王、執行権、第8条：司法権、第9条：摂政、第10：国王の子供たちの教育、第11条：国民防衛力

第3章「1791年憲法の構成と内容について」では、憲法がポーランド法制史に占める役割について紹介した後で、諸身分に関する条文の内容分析、ならびに国制に関する条文の内容分析を行った。

そのうち前者では、憲法付属の『王領都市法』において都市民に対して都市身分強化の施策と有力都市民のシュラフタ身分への取り込みの姿勢の双方が見られること、また農民問題に関しては、重農主義的立場とシュラフタの離反を防ぐための一定の農奴制規定の維持の姿勢との間のジレンマなどを指摘した。

また後者に関しては、憲法に占める割合も多いということもあり、多くの特徴を指摘した。箇条的に記すと、立法の神殿としての議会機能の充実化（議会の常設化、代議院の元老院に対する優越、多数決制の維持、決議における自由拒否権の廃止、国民全体の代表としての代議員の位置づけ）、安定した、ただし必要最小限の権限を備えた王権（ザクセン家による国王世襲制、無答責の国王）、中央行政機構の充実（内閣的機能を持つ「法の番人」の設置、大臣責任制）、地域に密着した法廷と司法機関、「国民の最強の盾」としての軍事力、ポーランドとリトアニアの関係の平等性などが

重要であることを指摘した。

「終章」においては、この憲法のその後の短命であった状況と、それが19世紀以降のナショナリズムや国民の記憶にどのように反映されたのかを考察した。

2：本研究助成の成果として執筆済みだが、現在は未刊行の論文は以下のとおりである。

白木太一「近世のルシ県におけるシュラフタと地域社会に関する一考察—クラシツキ家とフランシシェク・カルピンスキを例に—」

本稿は、東京外国語大学の関口時正教授、篠原琢教授を編者として、2008年に実施されたガリツィア国際移動セミナーへの研究成果報告書という形で近刊予定である。以下にその要約を記す。

第一次ポーランド分割（1772年）後にオーストリア領に編入された「旧ガリツィア」の中核に位置し、53,000平方キロメートルの面積（マウォポルスカ州ではキエフ県、ブラツワフ県に次ぐ）を擁していたルシ県を研究対象に絞った。この県のシュラフタたちはルシ県の地域社会の中でどのように人間関係を築いていったのか。本稿ではその一例として、近世後半のルシ県出身の一家門と一人物を取り上げる。すなわち、詩人、文学者、批評家であったイグナツィ・クラシツキ（1735-1801年）を生んだクラシツキ家と、詩人として知られるフランシシェク・カルピンスキ（1741-1825年）である。この両者は、ルシ県の地域社会のどんな人間関係を足掛かりにしてその絆を広げていったのか。その道を辿ることで、近世ポーランド社会における地方の人間関係を知るための一つの手がかりを探った。以下、章毎の要旨を記す。

第一章「16世紀のクラシツキ家とルシ県とのかかわり」では、16世紀のクラシツキ家が、どのような経緯でルシ県の私領都市ドゥビェツコを拠点に定め、国王への奉仕や宮廷とのかかわりの中で、宮中官職や地方官職を獲得しながら地方大貴族としての地位を確立し、勢力を拡大していったかを、特にスタニスワフとその二人の子（マルチンとイェジ）の活動を中心に考察した。また後半では、民・軍双方の地域権力を掌握し、「神」「国王」「教皇」「シュラフタ」という四つの塔を持つ壮大かつ瀟洒な宮殿、クラシチン城を中心に家門の繁栄を築いたマルチンが死亡した後に、弟や息子たちを中心とするクラシツキ族の家産相続問題が泥沼化していった状況を、主としてプロソポグラフィ的視角から具体的に考察した。またこの相続問題には聖職法廷、国王、ヴィシニアの地方議会などの諸

権力が複雑に絡み合っていたことも考察した。

こうした一族間の継承争いは、イェジの子供たちの世代になっても止むことはなかった。

クラシツキ家の場合、1672年にポドレ県知事のマルチンが死んだ後、ルシ県においてクラシツキ家は元老院議員を出すことがなくなった。マルチン以降、兄弟間、叔父甥の間での相続をめぐる合法的、暴力的抗争が絶えなかった。こうした状況はこの地域の中流マグナートや富裕シュラフタの間では一般的な現象であったように思われる。

次に第2章「イグナツィ・クラシツキ（1735－1801年）とルシ県とのかかわり」では、18世紀のイグナツィ・クラシツキを中心にその後のクラシツキ家の盛衰を考察した。

イグナツィ・クラシツキは先祖二代がいずれもヘウム城代となり地域の名士であった。ただし父の代には資産が目減りしていた。1735年に生まれたイグナツィはイエズス会学校で教育を受けながら成長したが、諸般の事情で聖職者になる道を選び、教会での弁舌で得た名声を武器に、新たなパトロンを見出そうと汲々としていた。

聖職者セミナリウムを卒業後、イグナツィは改革に熱心なプシェミシル司教シェラコフスキに見込まれ、彼の取り計らいで各地のマグナートに紹介された。同時に、キエフ司教カリエタン・ソウティク（共和派、ザクセン派）、さらに1761年以降は、当時の宮廷につながる有力者でキエフ県知事、共和国東南部随一の勢力を誇ったフランチシェク・サレジ・ポトツキとの関係を深める。イグナツィはポトツキの援助でローマ留学を果たし、ルシ県の聖職の階段を着実に上っていた。こうした状況は、当時の中流シュラフタが目指した、常套的な出世の手段でもあった。さらにポトツキの保護を受けながら、議会開催中のワルシャワに滞在した。1763年に国王アウグスト3世が死去した。翌年になるとイグナツィは、ポニャトフスキに対するポトツキ側の使者に任じられ、ポトツキ陣営からポニャトフスキが属するチャルトリスキ派へと鞍替えした。この選択は、その後のクラシツキの運命を大きく変えることになった。イグナツィがルシ県の聖職者のネットワークから飛躍できた背景には、ポトツキ派からチャルトリスキ派への鞍替えと、チャルトリスキ派出身のポニャトフスキが国王に選出されるという大きな偶然が不可欠であった。

さらに第3章「フランチシェク・カルピンスキ（1741-1825年）とルシ県とのかかわり」では、18

世紀後半のルシ県における零細シュラフタが地域社会といかにかかわったかを示す一例として、回想録『わが時代、ならびに私と共に生きた人々の物語』の著者でもあるフランチシェク・カルピンスキを取りあげた。

カルピンスキの父は無官の零細シュラフタであり、先祖伝来の多くの迷信を信じ、西欧的なものを毛嫌いしていた。その後彼はスタニスワヴフのイエズス会学校に就学するが、見聞の対象は近隣に限られていた。さらにルヴフのイエズス会アカデミーで学んだ後、ウィーンに留学した。彼の生活圏が広がる大きなきっかけになったのは、ルシ県に滞在中のアダム・カジミェシュ・チャルトリスキと偶然知り合ったことであった。チャルトリスキは彼を秘書官として雇い、ワルシャワで政治活動に従事することになった。このころになると、彼の行動範囲はルシ県全域はもとより、マゾフシェ地方、ポドラシェ地方、さらにはリトアニア大公国へと広がっていくのである。

しかし彼自身のマグナート宮廷社会への適応力のなさや相俟って、ワルシャワでの生活に失望したカルピンスキは、ルシ県に戻り領地の請負人として生計を立てる日々を過ごす。その後再びワルシャワに出て、そこで知り合った国王の妹イザベラ・ブラニツカの寵児として、ピアウイストクへ向かう。こうしてカルピンスキは、無官のまま詩人として、ピアウイストクとワルシャワとを往復しながら、ルシ県を離れて漂泊の生涯を送ったのである。

最後に「おわりに」で全体をまとめた。様々な地域権力の間での抗争が絶えなかったルシ県で、中流シュラフタや零細シュラフタはどのような形で権力や自らの地位を保持しようとしたのか。本稿では、まとまった史料の残されているクラシツキ家とカルピンスキの地域社会とのかかわりを、主として官職面や人間関係の面から考察した。その考察を通じて、零細・富裕シュラフタを問わず、シュラフタが社会の階段を上る際に必要な要素が何であったのか、あるいは両階層の出世パターンの相違をある程度検討することができた。もとより上記の仮説は一例に過ぎない。今後多くの実例をもとに検証していくことが必要である。そうすることで、近世ポーランド社会の多様な特徴が浮き彫りになっていくのではないだろうか。

IV. 研究の課題と発展

現段階では研究成果という形でまとめられなかったが、今後の課題としてこれからも研究していきたい問題も少なくない。以下に三点ほどあげておきたい。

(1)新たな論文の構想—「イグナツィ・クラシツキ『パン・ポトストリ』の社会的背景— 18世紀後半のポーランド＝リトアニアにおける地主貴族の理想と現実—」(仮題)

イグナツィ・クラシツキは、ユートピア小説『パン・ポトストリ』の著者でもある。この小説は、当時の富裕シュラフタ地主で「ポトストリ(副膳官)」という官職をもつ人物を主人公とするユートピア小説であるが、それまでの東方文化の影響を強く受けたサルマチア的シュラフタ像と西欧的地主理念とをいかに調和・融合させようとしていたのかを知る上で極めて重要な史料になると考えられる。その際、クラシツキがポーランド文化史上でどのように研究されてきたかを踏まえる必要があるが、そうした研究史と一次史料の検討を組み合わせることで、近世ポーランド＝リトアニアにおけるシュラフタ地主の理想像が何であったかが明らかになるであろう。また、ここでクラシツキが取り上げた副膳官という官職は、地方の名誉官職のひとつとして実在するものであった。この作品の分析を通じて、当時の地方シュラフタが官職の問題をどのように捉えていたかを知る手がかりとしたい。

(2)アダム・ザモイスキのスタニスワフ・アウグストに関する評伝『ポーランド最後の国王』(原典は英語版、ポーランド語版もある)の翻訳を引き続き行いたい。本書はスタニスワフ・アウグストに関する最も包括的な研究・啓蒙書であり、近世ポーランドにおける最後の国王を政治面だけではなく社会・文化的側面から描いた書である。ヨーロッパ中部における啓蒙君主の一人として、我が国にその実像を紹介する意味はあると思われる。現在は3分の2程度を訳出した段階だが、今後この作業を継続していきたい。

(3)ヴァルミア研究に関して、前述の拙稿では十分に触れられなかった点も少なくない。具体的には、ヴァルミアの司教行政と他の司教区との比較の問題、ヴァルミアにおける聖職者の在地性の問題、ヴァルミアと王国領プロイセンとの法的・人的結合関係の問題などがそれである。これらの課題に関しては、今後も継続して追究していきたいと考えている。

①オルシュテイン城



②リチバルク城



③フロムボルク大聖堂とバルト海



④グダンスク市庁舎

